

記念號刊行の辭

會長 内野熊一郎

東京文理科大學漢文學会は、會報第十四号を、母校の發展的閉學式記念号として、世に送る。執筆者の諸氏は、みなこれ現下我が学会のそれぞれの分野を象徴する人材である。之が月旦は、即ち我が学会二十年余の歩みに対する功罪判定であり、我らは心を虚しくして、その破邪顯正の教示に省思すべく、切に期する所あるものである。此の意味で、本記念号を、私は学会の責任者として、無限の愛撫と、翼々たる恐心と、烈々たる自己改進の決意とを以て、慎んで会友並に學界江湖に捧げたい。

抑々我が学会は、故穆堂島田教授を會長に戴き、田波學兄總代として昭和七年二月創設せられて以來、斯學の研究と普及とを目標に、孜孜切蹉して月將の旅をつゞけ、遂に昭和八年三月には、待望の會報第一号を創刊、些さか學界眷顧の恩義に酬いたのであつた。爾來戰時中、數年の休刊蟄伏はあつたが、諸橋・内野（巳）両會長を経て、竹田教授會長に就かれるや、斯學復興の英図を實現せられ、昭和二十六年十一月復刊第十三号を公刊して、先づ本学会の新抱負と進向づけを呈示せられたのである。二十七年三月、會長竹田教授の定年退職せられるに及んで、不肖その後図を汚し、今此の記念号に、永い過去千態の謝恩と友愛と感懷とを覃め、遙かなる未來への新生期待と切願と決意とを盛つて、懐しい母校文理科大學漢文學会の發展的迹遷を送り、且輝かしい教育大學漢文學会の再生を迎へんとするものである。

憶へば、万感交々至る学会二十有四年の精進史であつた。会友同朋凡て二百有余。英才をいだきつゝ、既に幽明を異にした丈夫も幾人か。私はそれらの明靈を悼みつゝも、誓を聞くのである。人生順逆あり、勢ひは時として吾らに己みがたい所。されど、それだけに、成敗事に臨んでの吾人が進止は、省思清明であつてほしい。今や道義の自覚高揚は、眞理の探求に一步先んじて三思さるべきである。一言万思、同朋と共に往き、偕學偕成、道の純粹確立の爲には、輕毛の一己は敢へて堵せんとするもの。倅に諒せられよ。(二八・三・一八稿)